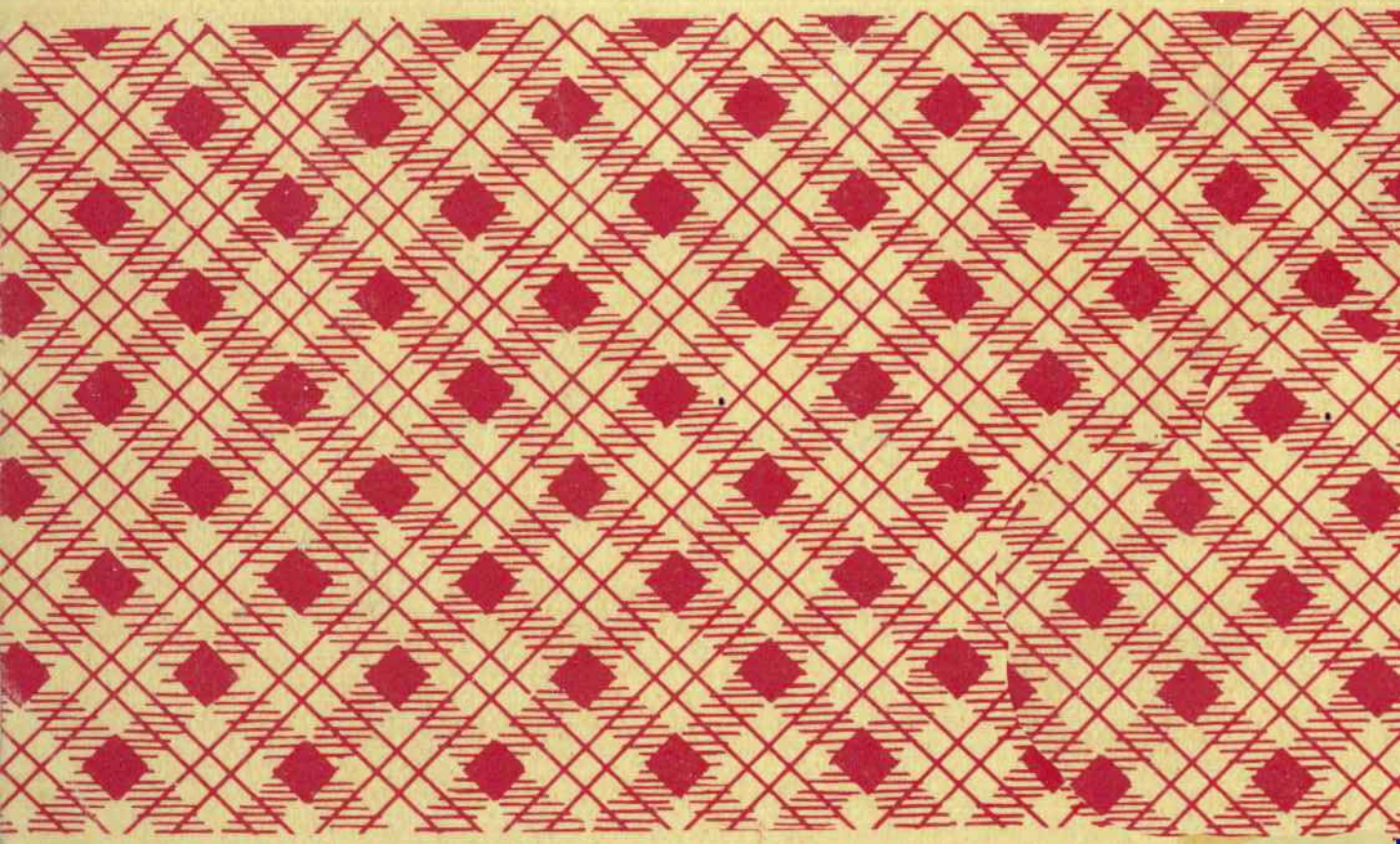
ミステーク時代

赤松光夫



AKIMOTO BUNKO

秋元文庫

ミステーク時代

昭和48年12月15日　第1刷発行
昭和49年 8月10日　第3刷発行

定価はカバーに表
示してあります。

■著者紹介

赤松光夫
（あかまつみつお）

昭和6年徳島県生まれ
京都大学文学部卒業
主なる作品
「三等高校生」
「初恋実験中」
「まあ失礼ね」
「ハートでアタック」
「われら劣等生」
他多数
現住所
東京都狛江市和泉 763

著　者■赤松光夫
発行者■秋元英子
発行所■株式会社 秋元書房
■〒162 東京都新宿区赤城下町42
電話 東京(268)0758(代)
振替 東京 2 7 0 4 7

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

印刷＝暁印刷　製本＝大和工業

© MITSUO AKAMATSU 1973

0193-B007-0029

秋元文庫

ミステーク時代

赤松光夫著

秋元書房

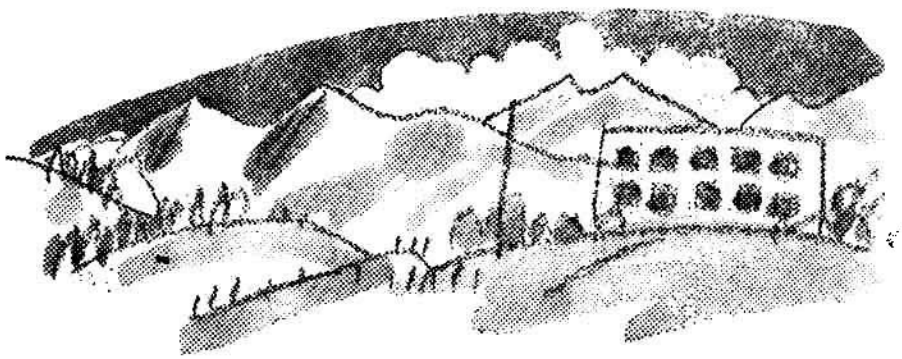
目次

ミス城山高校　7
二人の秀才　19
美女とニキビ　36
先生の秘密　47
模擬試験　65
告白　88
とかく先生というものは　118
校長先生大いに怒る　135
オババのトンチ　172
文化祭　184
グッド・バイ　198

カバー・さし絵　杉山卓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ミステーク時代



城山高校の秀才と鈍才たち

宮本　武――三年生。雑貨屋の息子でいがぐり頭、あだなはムサシ。東大現役入学の有力候補。

斎藤又八――三年生。小学校時代は神童とさわがれたが、中学、高校と進むにつれ、だんだんメッキがはげ、現在は、クラス一、二をあらそう劣等生。しかし、悪知恵には特異な才能を持っている。

佐々木次郎――三年生。東京の高校から転校してきた秀才づらの新入生。白せき。ハンサムで、腕力も強い。

藤枝礼子――二年生。開業医の娘、さしずめミス城山高校というところ。

遠藤竜海――国語の先生。独身、あだ名はタクアン。お寺の息子で東大出身。女生徒からもっとも人気がある。

ミス城山高校

一

県立城山高校は、K川の清流にそい、遠く頂に白い雪の衣をつけた南アルプスの連峰がはるかに見渡せる場所にあった。

古くは、ここに城があったが、今はもうその跡形もなく、運動場の一角に今も残る、つたのはえ茂った石垣にそのなごりをとどめているだけであった。

いがくり頭の宮本武はこの城山高校三年生。同じクラスの斎藤又八とK川の堤の上に腰をおろしていた。

彼らは学校からの帰り道であった。堤の下には、桃の花が咲いている。

山に囲まれたこのあたりは、いくらか花の咲くのがおそいようである。

ふたりは高校のあるこの村の小学校時代からのクラスメートであり、親友であった。斎藤家といえば、この村ばかりでなく、他村にも知られた山林持ちの古い素封家で、又八は小学校時代はずっと級長をつとめて、そのころはどちらかというと、武より又八のほうが秀才であり、雑貨屋のむすこである武は後塵を拝して劣等感を味わっていた。

だが、不思議なもので、人間にはいろいろなタイプがある。
又八は、中学、高校へと上るにつれてだんだん神童から凡才に変わっていった。いや、高校三年生の現在では、劣等生に近い。
それに反し、武のほうはしだいに頭角を現わし、現在では三年進学クラスで一、二を争っていたのである。
しかしふたりの立場は変わっても、どういうわけか、憎めない仲であった。
「なあ、ムサシよ、少したのみたいことがあるんだがなあ……」
又八が、チラッと武の顔を見上げながら臆病そうにいった。
ムサシというのは武のあだなである。
武はその頼みがなんであるか、だいたい見当がついた。
どうも最近の又八は、勉強より彼の顔にポツポツとニキビがふえるにしたがって、女性に対する関心を、ますます深めてゆくようである。
彼が目下熱愛している女性は藤枝礼子だった。といってもそれは一方的なもので、礼子のほうには一向にそんなそぶりはなかった。藤枝礼子はやはり城山高校の生徒だった。彼らより一年下で、二年生である。
礼子の家は、この村の開業医である。
「で、その頼みというのは…」
ギョロリとした目をして、色の浅黒い武は又八を見た。

「おまえから、彼女に手紙を渡してもらいたいんだ……」
ひょうたん顔の又八は、あごのあたりにできたニキビをつぶしながらいった。
「しかし、なあ……」
武はいがくり頭に手をやって、頭をかいた。
彼としても親友のよしみで、又八のいうことを聞いてやりたいのはやまやまである。だが、すぐにはイエスとはいえなかった。恥ずかしいというだけではない。ほんとうのことをいうと、彼もまたずっと以前から礼子が好きであったのだ。
しかし彼の場合は、どういうわけか好きな女性のことは友人にもいえないし、むしろそんな女性のまえではいかにも無関心なそぶりを見せる。だから、又八がそれに気づかなかったのもまた当然であった。
武が返事をしないのを見ると、又八はちょっと失望の色を見せたが、彼はなおも強引にいった。
「なにも恥ずかしがることないじゃないか。おれの手紙だもの。これ、斎藤君に頼まれたっていえばいいじゃないか」
又八は武の胸の中など頓着なしに、人ごとのようにいう。
「しかし……」
武がまたもちゅうちょの色を見せると、今度はちょっとおこった顔つきをした。それでふたりがしばらく無言になると、又八のほうから武のきげんをとるように話題をかえてきた。
「おれ、いま困ってるんだ。実をいうと、うちのオババが絶対東大を受験せにゃいかんというん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だ」

さもありなん、彼の祖母というのは、若後家で通し、子ども、つまり又八の父親以下四人の子どもを育てあげた、しっかり者で名の通っているおばあさんである。

祖母にすれば、又八が今は劣等生になり下がっているとは露知らず、目に入れても痛くないかわいい孫が、小学校時代に神童のほまれ高かったことだけを覚えていて、周囲のうわさ話で東大こそわが孫にふさわしい大学と考え、この村からいまだかつてひとりもはいったことのない東大に又八をゆかせるのだと、近所にもふいちょうしていたのである。

だが、そんな期待を持たれた又八こそいいつらの皮だ。

「そいつは困ったな。おまえのところのバアサンは、ガンコだからな。しかたがない。東大にはいるんだな」

武は皮肉にいった。

「馬鹿いえ、おれなんざ、百年たってもはいれるかよ。そのうちオババは死ぬかな」

又八は、つまらなそうな顔をした。

そして彼は、自分の重たい気分をはらいのけるように、またも話題をかえた。

「ところで今度東京から転入学してきた佐々木って奴は、いったいありゃ何者だ。好かねえ奴だな。いやにキザじゃないか……」

又八は口をとがらせた。しかし佐々木という男に対するいやな感じは、必ずしも又八だけのものではなかった。

一週間ほど前、新学期そうそうに佐々木次郎が、初めて彼らの前に姿を現わした時から、クラスの男生徒は、おそらく全員それを感じたであろう。

相手の正体がよくのみこめなかったからだけではない。そのすらっとしたスタイルのよいからだつき、きりっとした白皙(はくせき)の顔、ほどよい長髪、いなか者の彼らには、いかにも秀才に見えたからである。

佐々木次郎は、東京の高校から転校してきた。理由は、父親がこの土地の農業試験場に赴任してきたからであった。

「生意気な野郎だな。おれたちには口もききやがらねえのさ。この間も宿題やっていなかったからちょっと見せろっていったら、自分でやりなだとよ」

又八はいった。しかし彼はそんなことより城山高校の女生徒の関心が彼に集まりはしないかと恐れていた。

そのとき、

「おい、礼子が来るぜ、な、たのむ、この手紙をなんとかたのむ」

いつの間に用意していたのか、あわててポケットから白い封筒にはいった手紙を又八は武の手に握らせると、一目散に堤の下にかけおりていった。

藤枝礼子は、ちょうど下校の途中であった。彼女は二年生。二年Aクラスでは、ミス城山という評判さえあった。色は黒いが、きりっとした顔だち、そして目が涼しく印象的であった。

ふいに宮本武から手紙をつき出され、一瞬けげんな表情になったが、それが手紙だとわかると、

彼女の顔は赤らんだ。
「あの……、あの……」
武は、骨っぽい手をぶっきらぼうにつきだしてどもっている。
そして、
「すんません」
そういうなり、あわてて武は一目散にかけ出していった。

二

礼子の手には白い封筒が残されていた。
手紙の文面はこんなふうであった。
「前略…、夢うつつに見るあなたの顔は、夜空の星です。いや、ダイヤモンドです。なぜならぼくはあなたを愛しているからです。どうかぼくの心のうちをお察しください。あなたの、水茎の跡もうるわしい返し文をいただければどんなに嬉しいことでしょう。くれぐれも、伏してお願い申しあげます。
斎藤又八
藤枝礼子様」
いびつなヒョウタンのような顔をした又八に、こんな文章で星だのダイヤモンドだのといわれても、たいしてうれしいものではない。

礼子は、こわいような気持ちで読み始めたが、しまいにはおなかをおさえて笑い出してしまった。しかし笑い出しながら、なにか自分の胸の中にはりつめていたものが、音もなく崩れ落ちてゆくさびしさを覚えた。

彼女は最初、その手紙を宮本武のものだ、と考えていたからであった。

だが、そうとは知らず又八のほうは、礼子からの返事を一日千秋のおもいで待っていたのだ。

だが、もちろん、礼子に、そんな意志などあろうはずもない。永久に来ぬ返事である。

そして、二日たち、三日たち、礼子は廊下ですれ違っても知らん顔をしている。それには又八もややいらだっていた。

一週間目に、ついに又八はしびれを切らしてしまった。その日、彼はきょうこそ礼子を学校の帰り道で待ち伏せ、どんなことがあっても手紙の返事を聞こうと決心した。彼はいつもより早めに、授業が終るとすぐひとりで学校をぬけ出すと、礼子がいつも通るあの堤の上で待ち伏せることにした。

堤のタンポポやレンゲの花の咲く斜面に寝ころび、のどかな春の日を浴びて三十分も彼は待っていた。そしてほかの連中に顔を見られないため、顔の上に、学生帽をのせていた。

やがて礼子の姿が向こうに現われた。しかし、彼女はひとりではない。彼女の友人の吉村歌子といっしょである。

「チョッ」

これはまずいなと又八は舌打ちしたが、このチャンスを無にすることもできない。彼は胸のど

うきを押えながら、ふたりの近づいてくるのを待った。
礼子たちは又八に気づかず、彼の前を通り過ぎようとした。又八はからだをブルッとふるわせ、おもむろに立ちあがった。
そして、
「ちょっと」
と、ふるえ声で相手を呼びとめた。
そこに寝ていた男が又八だということに気づいて、礼子はギョッとしたらしい。それでも足をとめふりかえった。しかし、すぐなにか不安を感じたらしく、又八にはかまわずに歩き出そうとした。それで又八はあわてながら、学生帽をワシづかみにした手をひろげ、ふたりの前に立ちふさがった。
「なにすんのよ。ここは天下の公道よ」
太っちょの歌子が事情を知らないまま、腹だたしげにいった。
「ああ、そうとも。ここは天下の公道だ。だからお前に用はないんだ。お前はとっとと早く帰ればいいんだ。トンカツめ！」
又八はこの邪魔者がいてはと思ったから、腹だちまぎれにそういった。
「なによ。トンカツとはなによ！」
二年生でも、歌子は女ケッというあだながあるように負けてはいない。顔を赤くほてらしながら、又八にくってかかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com